

# 鹿町のはなし

鹿町町は、長崎県本土地域の最北部、北松浦半島の北西部を町域とし、佐世保市市街地から北西へ約 20km の場所に位置する。

町域南西部から北部にかけて海に面する。

沖合いには九十九島と呼ばれる多数の島が点在する場所がある。

北部は半島に切り込んだ湾（江迎湾）に接している。

≪ 平成 22 年 3 月 31 日 江迎町とともに佐世保市へ編入合併して、佐世保市鹿町町となった。 ≫



## 人口の移り変わり

鹿町町では、明治から大正にかけて、多くの小規模炭鉱が開発され、昭和になると国策による石炭政策によって、炭鉱は増強拡大され、炭鉱人口は異常な増加をした。昭和 22 年には、17,000 人を超し、同年 10 月町制を施行した。その後も人口は増加して、昭和 25 年には 4,087 世帯、20,405 人となった。

しかしながら、昭和 35 年頃になると、エネルギー革命によって、炭鉱の規模縮小や閉山が相次ぎ、昭和 48 年には鹿町町から全ての炭鉱が姿を消し、昭和 50 年には 1,745 世帯、6,300 人に減少した。

その後も人口は減少状態が続いている。その間、町は、企業誘致や公営住宅の建設など、人口増加対策に努力を重ねてきたが、交通体系の整備、コンピューター化社会の到来、バブル崩壊による経済不況などが、人口の都市集中を促進し、特に若年層の都市への流出傾向に拍車がかかり、少子化社会とも相まって高齢化現象は一層顕著になっている。(平成 23 年 10 月 1 日現在、1,885 世帯、4,938 人である。)

## 『鹿町』の由来

鹿町は、徳川時代、平戸藩に属し、古くから「ししまち」と呼ばれました。「鹿待」と書かれた記録があります。「鹿」は、古くは「しし」と発音されました。伝えばなしによれば、鹿町にある北松浦半島は「鹿」が多く、世知原から佐々、小佐々、鹿町へと「鹿」が動き回るのを想像すると心が和みます。

平戸の殿様は、たびたび「鹿狩り」を行い、家来の者に鹿を追いたてさせ、鹿町あたりで鹿を待ちぶせして、仕留めたといわれています。「鹿待」の地名はこうして生まれたと考えられます。長い間「ししまち」と呼ばれ、「鹿待村」と表記されました。

昭和22年10月1日、町制施行にあたり「鹿町町」となり、昭和33年に町名を「鹿町町」と改めました。

やはり、「鹿」と関係が深かったとみえて、初めての小学校の名が「鹿が鳴く」＝「鹿鳴」小学校であり、歌ヶ浦小学校の前身です。

また、鹿が好んで食べた草「苎」（じしばり）から、鹿町小学校の旧名は「野苎」小学校といました。

かわいい鹿が多く見られ、秋になると鹿の鳴声を聞いた当時の人たちの幸せとやさしさが憶ばれます。

旧町花-つつじ



旧町章



旧町木-かしの



# 鹿町のむかし

## ○縄文時代

### ・寒冷から温暖へ

いまから約 12,000 年ぐらい前、それまで地球をおおっていた氷がとけはじめ、氷河期が終わり、気温が上がり暖かくなって、植物も寒さでも育つ針葉樹から、温かさを好む広葉樹の林が繁るようになりました。

動物も、ナウマンゾウ、マンモス、オオツノジカなどの大型のものが姿を消して、クマ、シカ、イノシシ、ウサギ、タヌキなど、現在みられるような中、小型の動物が多く見られるようになりました。いまの、日本列島の形ができあがったのもこのころだといわれています。

### ・土器の発明

日本のあちこちで出土した土器やその破片を調べると、今から一万二千年前には、日本列島で土器がつくられていたことがわかりました。おそらく、火を使っているうちに地面が赤く焼けて固まっていることに気づき、それをヒントにして土器が作られたと考えられます。

気候が暖かくなって、ドングリ、クリ、トチなどの木の実が多くなり、これらを保存したり、加工するために土器が使われるようになったのでしょう。こうして、人々は獲物を追って移動する生活から、同じ場所で生活するようになりました。

### ・縄文土器

土器の表面の文様や土器の形も、時代によって変わり、使い方によって種類や形がちがっています。縄文時代の土器の表面には、さまざまな文様や飾りがつけられていますが、この文様に縄をおしつけた「縄目文様」がつけられてあることから「縄文土器」と呼び、この時代を「縄文時代」とよんでいます。

## ○ 弥生時代

### ・ 弥生土器の発見

明治17年（1884年）東京都の弥生町の貝塚から、縄文土器とはちがう、厚みのうすいつくりの、文様のない土器が発見されました。発見場所の名をとって「弥生土器」と呼ばれるようになりました。「弥生時代」紀元前4世紀ごろから3世紀ごろまでの間です。

### ・ 稲作と渡来人

稲作は、中国の長江流域（中・下流）ではじまり、朝鮮半島をとおって、縄文時代の終わりごろ（紀元前4世紀ごろ）玄界灘沿岸へ渡来人とともに渡ってきたともいわれています。

渡来人たちは、川に近い稲作に適した土地に住み着きました。この人たちは、日本に以前から住んでいた縄文人たちと同化しながら稲作文化とともに日本全国に広がっていきました。

### ・ 大陸系磨製石器

石斧は、木製の農具やいろいろな木製品を作るのに欠かせない道具です。

弥生時代には、ほとんど石を磨いてつくった磨製石器で、それも大陸系磨製石器と呼ばれ、中国大陸や朝鮮半島で使われていた石器がもとになっています。

鹿町町内で出土した「石包丁」もこの仲間です。石釜は、使いみちによって、大きいもの、固いものを加工するように作られました。

## ○ 鹿町の縄文・弥生時代

温暖な気候に恵まれ、豊富な地下水が湧き、海岸では魚介類や海草が容易にとれる鹿町は、ひとが生活するには適地であったのでしょう。

縄文・弥生時代の人々の生活の跡であったと思われる遺跡があり、遺物の出土があったのは、天狗岩の下方のニッ石溜池、目暗ヶ原、ロノ里の宮田ヶ原溜池などです。（出土品は鹿町町歴史民族資料館に収蔵されています）

また、御堂溜池上には縄文人が住んだ跡に、弥生人が住んだ跡があります。

竪穴住居柱跡、火口跡の炭化した断片や、縄文式土器の破片、土偶なども出土しています。地表から1メートル余の層に縄文人の生活の跡があり、30センチメートル余の層からは、弥生人の生活の道具が出土しました。

鹿町では、一、二の例を除いて、縄文時代の人は、150メートルから200メートル程度の高地で生活していたようです。獣を捕らえるには、見晴らしのきく尾根筋を動きまわり、木の実などをとるのにも適していたのでしょう。

その後、稲作で水田農耕をするようになった弥生時代の人々は、平地で水田の近くに住居をかまえるようになりました。

鹿町町内で採取された縄文・弥生時代の使用石器類は、ほとんど黒曜石で、一部には頁岩、サヌカイト製のものもあります。

石器の材料である黒曜石は、鹿町の近くではほとんど産出されません。



大野台遺跡

## 近現代の鹿町

- ・1889年4月 - 町村制施行により鹿町村が単独村制施行して北松浦郡鹿町（ししまち）村が発足。
- ・1905年8月14日 - 村役場を鹿町免から下歌ヶ浦免に移転。
- ・昭和22年10月 - 鹿町村が町制施行。鹿町（ししまち）町となる。
- ・昭和33年10月 - 鹿町（しかまち）町に改称。
- ・昭和36年4月野上鉱業・御堂鉱業所閉山
- ・昭和37年4月県立鹿町工業高校開校、神林鉱業閉山
- ・昭和38年5月日鉄鹿町鉱業閉山
- ・昭和39年10月国民宿舎「歌ヶ浦荘」開館
- ・昭和44年10月第24回国民体育大会高校野球軟式野球会場
- ・昭和46年4月歌浦・神林両小学校が統合し歌浦小学校となる。
- ・昭和47年6月鹿町・歌浦中学校が統合し鹿町中学校となる。
- ・昭和54年7月文化会館完成
- ・昭和57年3月鹿町勤労者体育センター完成
- ・平成元年4月町木に「かし」・町花に「つつじ」を指定
- ・平成2年8月国民宿舎「歌ヶ浦荘」民間へ経営移譲
- ・平成4年4月長串山ビジターセンター開設
- ・平成8年4月県立鹿町工業高校敷地内に温泉湧出
- ・平成9年10月樋口ダム完成
- ・北海道鹿追町との姉妹町提携、町歌制作
- ・平成11年5月鹿町中学校新校舎落成式
- ・平成12年7月海と島の自然体験館オープン
- ・平成13年7月鹿町温泉やすらぎ館・活性化施設開館
- ・平成17年2月長崎鹿町ウィンドファーム供用開始
- ・平成17年12月九十九島漁協誕生
- ・平成21年7月佐世保市・江迎町・鹿町町合併協定調印式
- ・平成22年3月鹿町町閉町記念式典
- ・平成22年3月31日 江迎町とともに佐世保市へ編入合併し、佐世保市鹿町町となる。